

鷹匠法律事務所の5つの特徴

- 1 アスベスト（石綿）被害について豊富な医学的知識、法的知識を有しています。
- 2 クボタショック以降、静岡県内のほとんどのアスベスト（石綿）被害を救済しています。
- 3 アスベスト（石綿）を原因とする病気に詳しい医師と連携しています。
- 4 労災申請手順の専門家である社会保険労務士が事務所内にいます。
- 5 弁護士全員が「静岡アスベスト被害救済弁護団」に所属し、被害者に寄り添い活動しています。

中皮腫

胸膜や腹膜から発生する悪性腫瘍を悪性中皮腫といいます。

がんの仲間であり、特にたちが悪く、今も有効な治療方法がなく、診断されてから短期間で死亡することが多いです。

中皮腫はアスベスト（石綿）の曝露によって発生する病気でその他の原因はほとんど考えられません。

アスベスト（石綿）曝露の開始から悪性中皮腫が発生するまでの潜伏期間は20年から30年以上だと言われており、医師であっても悪性中皮腫と診断することが困難で、時には誤診する医師もいますので注意しなければなりません。

胸膜の悪性中皮腫では胸水が、腹膜の中皮腫では腹水がたまるのが最初の症状です。

がん性胸膜炎やがん性腹膜炎と誤診しやすく、アスベスト（石綿）関連職場にいた労働者は、必ず医師に職歴を申告する必要があります。

肺がん

アスベスト（石綿）を吸引していると肺がんが発生しやすくなります。

アスベスト（石綿）の曝露量と肺がんの間には比例関係があり、吸入したアスベスト（石綿）の量が多ければ多いほど、肺がんになりやすいと言われています。

もっともアスベスト（石綿）の曝露量が少ない人でも、肺がんになる人はおり、アスベスト（石綿）に無難な量はありません。

アスベスト（石綿）による肺がんは潜伏期間が長く多くの人は曝露開始から15年以上過ぎてから発症しますので、タバコを吸う人はタバコが原因で肺がんになったと思いつむ人が多いものです。

この場合、職歴が大切になりますので、働いていた職場がアスベスト（石綿）を取扱っていたかが重要になります。

肺がんで手術した人の胸部CTがあれば、それを専門医が見直すことにより、アスベスト（石綿）が関与していたかわかる場合があります。

アスベスト（石綿）肺

アスベスト（石綿）を吸入しているとアスベスト（石綿）肺というじん肺が起こります。身体内に吸入されたアスベスト（石綿）によって肺の中の肺胞という部分が広範囲にわたって線維に置きかえられ、その結果、細い気管支が引っ張られて拡張します。特に肺の下方の細気管支全体が拡張して、蜂の巣のようにみえることから蜂窩肺と言われています。

アスベスト（石綿）肺は、肺の弾力性がなくなり、肺活量が少なくなりますので、せきやたんが出、呼吸が困難になります。

間質性肺炎という病気と誤診されがちですので医師に職歴を正しく伝えることが必要です。

びまん性胸膜肥厚

アスベスト（石綿）の曝露により肺の表面をおおう胸膜が炎症を起こします。

びまん性胸膜肥厚はアスベスト（石綿）曝露による胸膜炎が治った後に残った胸膜が癒着した状態を言います。

この状況では肺の働きが悪くなり、肺活量が少なくなり呼吸困難となります。

胸膜炎は短期間のアスベスト（石綿）曝露で発生し、左右の胸腔にくり返し水がたまり胸膜にゆ着を起こさせるものであり、このためもあってびまん性胸膜肥厚はアスベスト（石綿）曝露から20年以内に起こる病気としてアスベスト疾患の内では最も多いものです。